

## SFCで最も貴重な資源とは

慶應義塾の他のキャンパスに比べた場合、SFCはとても恵まれた資産を数多く持っている。緑に囲まれた環境や広い空、秀麗な富士山の遠望、清掃の行き届いた清潔な校舎、そして教員と学生との一体感の強さ、キャンパス全体を盛り上げようという教員全体の熱気や教員相互間の風通しの良さ、などがそれだと思う。

さらには、研究資金の面でも、全く不自由を感じない同僚が多い（残念ながら筆者はそうでないが）。こうした資産ないし資源は、今後とも一層有効に活かしていきたいものだ。

## 絶対量に限界のある「時間」

しかし、一方で大いに不足している資源がある。それは、我々が逆立ちしても絶対量として増加不可能な資源、すなわち「時間」がそれに該当するのではないか。より具体的にいえば、キャンパスで無数に存在する会議（誰かその合計数を数えた？）にわれわれは実に多くの時間を費やしており、このため研究・教育のための時間にかなりのしわ寄せがきている。しかし、会議のやり方に工夫を加えることによって、相対的により有効に使える時間を生み出さうのではないだろうか。

SFCでの日常経験からいうと、会議が定刻に開始するのはむしろ稀であり、定刻に会場に行っても責任者あるいは司会者すら不在の場合も少なくない。また、会議開始時点で出席者が少ないような場合には、あまり重要でない案件から取りあえず会議を始め、重要案件を後回しにするとか、遅刻者が入室した段階でそれまでの議論を改めて参加者全員に説明するなど、会議を長引かせる悪循環に陥っている場合もある。また、会議終了が何時になるのかが予めわかっていない場合も多いので、会議が玉突き的に遅延し、時間面、体力面で会議の効率がさらに悪化するようなケースも経験する。

SFCの四年生が就職活動を通して社会に接する際、彼らの一部にみられる時間的なルーズさが批判されている、とのうわさも耳に入るが、先ずわれわれ教員が時間を大切にすカルチャーを育成することから始める必要がありはしないだろうか。SFCのように、常時前進すること自体がモットーであるキャンパスでは、会議の数が多くならざるを得ない面もある。しかし、各会議の機能や必要メンバー数を見直して整理するとか、例えば可能な場合には電子メール会議も検討するといった余地もある。

幸いSFCには、こうした方面の専門家が少なくないのでその知恵を拝借しつつ検討できると思うが、筆者としては、比較的容易に実行可能な原則三点をあえて議論の種として提言してみたい。

## 会議効率化への三提案

第一に、会議は開始時刻での出席人数の如何によらず定刻にスタートさせる、そして例え議題を残すような場合でも所定の終了時刻（会議の案内状に予めそれを記入する）に終了させること。第二に、会議は必ず最も重要な議題から順に議論するようにすること。そして第三に、議題関連の資料は参加者全員に予め配布し（電子メール形式でよい）、それを精読していることを前提に行うこと。この三点である。

## 結 論

会議時間の制約がある場合、十分な議論を尽くせない可能性がある、との見方もありえようが、むしろ、時間を制約したうえで効率を高めることを考える方が望ましいのではないか。例えば、モーツァルトの音楽は、マーラーやブルックナーの芒洋とした音楽とは異なり、きちんと型に入った短い音楽であるが、密度が高く美しい。俳句も、五七五の十七音という制約があるからこそ、内容が凝縮されたものになる。会議運営も、これと似た面があるように思う。

(慶應義塾大学SFCニューズレター「パンテオン」八巻一号、一九九七年七月)